

船井情報科学振興財団奨学生レポート/第八回

2022年11月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

何か大きな決断を迫られると、時折無性に道灌山に行きたくなる。山と言ってもほんの小高い丘といった趣ではあるが、私が中高六年間を過ごした忘れがたい場所でもある。留学生活の終わりが少しずつ見えてきている折、また訪れたいと思った。

道灌山の上から、色々な電車の線路を見下ろすことができる場所がある。私がいつも使った山手線は今日も西日暮里から渋谷に向けて、京浜東北線は大宮まで、東京で日々を過ごす人たちを運ぶ。だいたいは在来線だが時折新幹線も走っていく。金沢や秋田といったずっと遠くの地を先に表示して、加速していくように見える。中高生特有の狭いしがらみから少しだけ離れたかったとき、たまにここに来ていた。そんなお金も度胸も時分持っていなかったが、遠くの違う世界へ行きたいとぼんやり願った。

思えば留学に行く前もここを吸い寄せられるように訪れた。東京は私にとって故郷であり、かけがえない場所である。東京が私の歴史の全てであった。しかし、そういう歴史を愛していると同時に、その歴史が自分の心を重くすることもある。もちろん留学すればこんな良いこと悪いことがあると色々な事を考えて留学を決断したがそういう算盤だけでなく、もっと単純に遠い国に行って自分の歴史を捨てて楽になりたいという気持ちもどこかあったように思う。

しかし異国の地で、私の歴史は抛り所であった。私の大学院には日本ですべて暮らしてからやって来た学生は私しかおらず、異国人にとって日本人とは私そのものと思われているようでした。常に生粋の日本人という属性で扱われているので6000マイル先まで行っても、自分の歴史を捨てることなどできなかった。皆がよくわからないアメリカやヨーロッパのあるある話や流行りの映画の話で盛り上がり、取り残された私は彼らにとって、私の価値は本業の仕事の品質と、私の少しだけ物珍しい歴史を語ることにしかないのではないかとすら感じた。自分の歴史を捨てて異国で生きるというのは、ごみ箱にポイッと捨てるというよりは自分にこびりついた油汚れをこそげ落とすような、そういう努力をしないと出来ないものかもしれないと初めて気が付いたが、そんな気力は湧かなかった。

自分の歴史、という少し言いすぎかもしれないが、少なくとも自分がずっと浸かってきた日本を研究対象に選んで、私はまた道灌山に戻ってきた。今日も通勤電車は日常を運び、新幹線はもっと遠くまで走っていく。私の場合は金沢とは言わず異国まで行って初めて、自分の歴史を完全に受け入れて共に生きる覚悟が出来つつあるように思う。

中学時代を過ごした校舎もグラウンドもそのままだったが、あの古くて砂ぼこりまみれの高校校舎はすっかり新しいものに建て替わっていた。見慣れた正門はシートを被ってなにやら大規模工事中だ。自分の中の記憶は薄れていくだけで変わることはないが、現実が変わっていく。自分の社会の歴史を今どう考えれば良いか、そこからどう世の中が変わっていくか、あるいはどう変われば良いのか。私はこういう仕事をしようとしているのだろうと、標高21mの道灌山から少しだけ自分を俯瞰した。